

「中国の事態は深刻」

福井新聞 政経懇話会 中嶋氏(東京外語大教授)が講演



中国問題について講演する中嶋氏

福井新聞政経懇話会の第百五十一回例会が、三十一日正午から福井新聞社五階ホールで開かれ、講師の東京外語大教授、中嶋嶺雄氏が「中国はどうなるか」のテーマで話した。中嶋氏は、外務省特別研

究員として香港に留学、また文化大革命以来の中国評論でサントリー学芸賞を受けるなど中国通で知られる。この日の講演でも最近の中国情勢について生々しい報告をした。その中で、「現在の中国は一見

平静を装っているが深刻な状況にある。一連の事件の真相はどこにあるか冷静に見極める必要がある」と話した。主な講演の内容は次の通り。

一、中国は今、一見平静さを装っているが恐怖政治が行われている。趙紫陽・前総書記が指名手配され、経済人、知識人らを含め、八千人が逮捕、摘発されている。さらに増えそう、ゆくゆくは百万人にのぼるとさえいわれている。そうなる、まさに「收容所大陸」の様相だ。それほど事態が深刻だということを裏付けている。

一、六月四日の軍による銃撃は、運動をしている人さえ考えていかなかったこと。近代化を図るこの大切な時期に、中国は取り返しつかないことを行った。人民の信頼を裏切ったことで、今後、近代化をやりとげることができかわからない。

一、八月後の一九九七年に中国返還が決まっている香港はパニック状態にある。香港の経済を支えてきた中間管理職、知識階級の海外脱出が続いている。イギリスのパスポートを持っている人はイギリスへの移住を求め、オーストラリアのダーウィン近郊に、ニュー香港を建設しようという話さえ出ている。

一、中国は国家財政が危機にひんしており、外貨不足になっている。開放政策で外貨が必要な時に、事件を起こしてしまった。さらに外債の返還が始まる。一九九二年から毎年百二十億米ドルを返していかなければならない。今後、中国との取引には中国の財政状態をよく知ったうえで、行わなければならない。

一、今回のデモの真相は何かというと、胡耀邦・元総書記の追悼、趙紫陽・前総書記を支援するものではない。それらはきっかけではあったが、学生らの本当のねらいは「官倒」にあった。中国共産党幹部、政府首脳の腐敗を無言のうち批判することだった。親の特権で子供が出世する、そういう腐敗ぶりをたまらないと思っていた。そのことを訴える学生らのハンストは、支持を得ていた。

一、ゴルバチョフソ連共産党書記長の訪問を受け、中ソ和解を達成したことで鄧小平氏ははっとしたに違いない。非毛沢東路線を歩んだ鄧氏に中ソ和解は必然のテーマで、感無量だっただろう。それで引退しようとしていたと思う。しかし、中国では、いかなる人も組織の上に君臨してはならないことになっている。それに、趙紫陽・前総書記はゴルバチョフ氏に「中国の重大事項は最終的に鄧氏が決断する」と述べ、最高秘密を漏らしたことで鄧氏と対決することになった。